

# 源氏物語と能楽——「源氏能」の考察——

飯富章宏（能楽師）尚絅大学非常勤講師「日本伝統文化」担当

## 【序文】

2001（平成13）年にユネスコより「人類の口承及び無形遺産に関する傑作」として宣言、また2008（平成20）年には「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に記載され、600年以上継承された、いわゆる世界遺産に選ばれた「能楽」という視点から日本伝統文化を考察してみる。「能楽」は仏教的世界観を根底に自然の中に神聖なるものを感知し、畏敬する演劇であり、観ずる者に「能」を貫く生と死の連結を伝え、死者の声に生の充実感を確認させるユニークな演劇である。

この稿では、1000年程度昔に編まれた「源氏物語」と「能楽」の作品の内、源氏物語に基づく「源氏能」の世界をみると、能楽の発展過程を考えてみようと思う。「源氏能」とは「源氏物語」を本説とする一群の能作品をいい、以降この意味で使用する。

## 【I】

以下、世阿弥と『源氏物語』（松岡新平）より抜粋

…世阿弥のところで『源氏物語』がどのように受け容れられたか、もしくは受け容れられなかつたか、という話をしてみたい。結論から言うと、世阿弥

は、生涯を通して『源氏物語』を敬して遠ざけていると思う。足利義満の場合、その王権簒奪のイデオロギー的背景の一つに「源氏物語」があることは確かだろう。もし、義満時代に「源氏物語」が政治的な場の中で動いている

状況があるとすれば、『太平記』物の上演を避けたり、きわもの際物の上演を避け古典物にレパートリーを絞るところからもうかがえる世阿弥の政治的な敏感さからして、世阿弥が『源氏物語』を敬して遠ざけるような態度をとるのは、当然といえるかも知れない。

## 〔引用①〕「世阿弥と『源氏物語』」（p.1）

能楽についての研究でも著名な松岡新平氏は世阿弥の作品の、源氏物が少ないとことについてこの稿の中で以下のように考察している。①政治的配慮により、あえて題材としなかった。②幼少時、あまりに「若紫」「紫上」「源氏の幼少期」に擬せられ、童として処せられた経験から遠ざけた。③二条良基から連歌詠みの規範とされ、あまりに源氏礼賛となつたので。かえつて扱いにくかった。④声変わりし成人になった世阿弥にとって、源氏を題材とする作品は自分にふさわしくないと思った。などの理由を挙げている。

私も氏の考えに基本的に同感である。世阿弥作の能がすべて現代に残っているわけではないが、現在確認できる世阿弥作の能の内、「源氏物語」からの能、（以降「源氏能」と呼ぶ。）は『浮舟』一曲のみである。後の金春禪竹以降、数多く「源氏能」が世に出るが、世阿弥作が一曲のみであるのは、意外と思える。

## 【II】

世阿弥も能楽論『一ノ道』には、以下のように記している。

女体能姿。一風体を飾りて書くべし。これ、ことに歌舞の本風たり。その

内におきて、上々の風体あるべし。あるいは女御・更衣、葵・夕顔・浮舟など申したる貴人の女体、気高き風姿の、世の常ならぬかかり・よそほひを心得て書くべし。しかば、音曲よしかかりをも、よくよく心得て、道の者の曲舞音曲などのやうにはあるまじきなり。長けたるかかりの、美しくて、

幽玄無上の位、曲も妙声、振り・風情もこの上はあるべからず。少しも不足にてはかなふべからず。かやうな人体の種風に、玉の中の玉を得たるがごとくなる事あり。かくのごときの貴人妙体の見風の上に、あるいは、六条の御息所の葵の上に憑き崇り、夕顔の上の物の怪(け)に取られ、浮舟の憑物などとて、見風の便りある幽花の種、逢ひがたき風得なり。古歌に言ふ。「梅が香を桜の花に匂はせて柳が枝に咲かせんより」、なほありがたき花種なるべし。しかば、かやうの風に相応したらん芸人をや、無上妙感の達人とも申すべき。

この中を現代語訳で見ると

〔引用②〕「世阿弥 風姿花伝・三道」(p.295)

女体歌舞能の中でも、最高の部類の能がある。例えば女御・更衣、もしくは葵の上・夕顔の上・浮舟などというような、貴人の女性の主人公が、気品のある姿で、世間一般とはまつたく違う趣きや服装であるということを、よくわかつた上で書くべき。〔引用②〕「世阿弥 風姿花伝・三道(p.297)」また、こうしたこの上なくすばらしい貴人の姿に、あるいは、六条御息所が葵の上に憑いて崇つたり、夕顔の上が物の怪に魅入られたり、浮舟の憑物の狂乱などといった、見応えのあるすばらしい花の種ともいうべき題材は、めつたに出会えぬほどの効果的な素材である。

〔引用②〕「世阿弥 風姿花伝・三道」(p.299)

とある。

「女御・更衣、葵・夕顔・浮舟などと申たる貴人」とは「源氏物語」の中の女性と考えてよいだろう。また「六条御息所の葵の上に付き崇り」は能「葵上」を、

「浮舟の憑き物」は能「浮舟」をそれぞれ背景にした説と考えられる。六条御息所の嫉妬の場面を描いた「葵上」は、世阿弥の先輩犬王道阿弥が得意としていた曲とされている。「浮舟」は、横越元久という武家歌人が詞章を書き、世阿弥が作曲した曲である。これらを女体の能の作品の中でも「玉の中の玉」と高く評価している。

### 【III】

「夕顔の上の物の怪に取られ」に関しては、現行曲「夕顔」にはこのような内容は見いだせず、またこの時点で「夕顔」という能は成立していない。「半部」は内藤河内守作で明らかに後代の作品である。『三道』にあげられる世阿弥の推奨曲二十九曲には、「浮舟」を除いて『源氏物語』に取材した曲はない。その「浮舟」もテキストは他人が書いたものだ。とすれば、「三道」が書かれた応永三十年、世阿弥六十一歳の時点で、世阿弥自作の源氏能はない、と考えてよい。ただ「須磨源氏」が世阿弥の作かどうか意見の分かれるところだが、もし世阿弥が作ったとしても、世阿弥の源氏能は最晩年の一作だけで、しかも女性物はない、という」とになるだろう。

ただ『三道』は、能の主人公となりうる男性として、「業平・黒主・源氏、かくのごとき遊士」のように光源氏をあげる部分がある。そうしてみると、『三道』の源氏能記述は、息子たちの世代に対して、「これからは源氏能の時代」ということを示唆したもの、と見ることもできよう。事実、この後、金春禪竹の「野宮」(ののみや)「玉葛」(たまかずら)をはじめとして、源氏能が多く書かれる時期が到来するのである。

### 【IV】

源氏能の考察として、まず「葵上」をとりあげてみよう。この曲は世阿弥より以前、近江猿楽の名手大王道阿弥作との見方が一般的である。確實性の検証はこれから文献調査に任せることとして、この作品の概要を観てみよう。

題名は「葵上」だが、実際には葵上は登場しない。舞台正面手前に一枚の小袖が置かれ、これが無抵抗のまま、物の怪に取りつかれて苦しんでいる葵上を表

す。物語の中心は、鬼にならざるを得なかつた御息所の恋慕と嫉妬の情である。

御息所は元皇太子妃なので、鬼に変貌しても、不気味さの中に品格を表す必要がある。特に、前場の最後、扇を投げ捨て、着ていた上着を引き剥つて姿を消す場面では、感情の盛り上がりをいかに表現するかと同時に、高貴さを損なわない動きの美しさを要求される。

この作品には、『源氏物語』らしい雰囲気を醸し出すための様々な仕掛けが施されており、前半では、見せ場の謡に、『源氏物語』の巻名が散りばめられている。また御息所が葵上への嫉妬に悩む直接の原因となつたのは、賀茂の祭の車争いに破れたことであるという室町時代の解釈を反映して、御息所は前半破れ車に乗つて登場するという設定になつてゐる。

さて、この能の本説（出典）は「源氏物語」のどこにあるのであらう。葵上（光源氏の正妻）が初めての出産の後、患つてゐる場面は葵の巻に見える。この巻のはじめ賀茂祭（葵祭）の際に、葵上と御息所の有名な車争いの場面があり、その時に恥をかかされた御息所が葵上の産褥を襲うという展開だが、本文中には明確にそれとはあらわされていない。ただ、源氏が御息所の生靈を垣間見たくらいの表現である。

しかし、室町時代には、御息所が葵上の命を取り殺したと、はつきり解釈されていて、作者はその前提で能を創作している。後年、世阿弥の改変が行われたのは確かであろうが、話の流れはこの通りである。

源氏物語での御息所は優雅さや気品といった表の姿と、内面での嫉妬や女の性との対比といった表現を感じるが、能「葵上」では情念の激しさが強調される。世阿弥は、この能のインパクトの強さに惹かれてゐるが、御息所を現すには「三道」に記述しているように

…かくの「」ときの貴人妙体の見風の上に、…見風の便りある幽花の種、逢ひがたき風得なり。

と評しているのである。現代では「葵上古式」として、車を出し、青女房がその轍に縋りつく演出が残つてゐるが、世阿弥はそのような部分を省き、後世に残

す改变をしたのかもしない。

世阿弥の『申楽談儀』における犬王所演『葵上』への言及を手がかりにすると、後妻打ち、怨霊調伏など本説の『源氏物語』には見られない場面を再検討した上で、『葵上』の改作が特に演出の面を中心に行われたと思われる。本曲が本説の『源氏物語』と隔たりがあることについては、初期の源氏能と言える『葵上』の段階では観客側の『源氏物語』理解が十分でなかつたことに加え、物語に忠実であることよりも前場に見られるような「後妻打ち」などの演出の方が興行上好まれたためではなかつたかと思える。

この点、後述する「野宮」とは趣を異とするように思える。

## 【五】

『野宮』の作者と考えられる金春禪竹は、猿樂能の本家ともいへば圓満井金春流の惣領として生まれた。若い時から世阿弥に憧れ、私淑する。世阿弥にも可愛がられたようである。後継者と目していた元雅を失つてから、流儀は違うがこの若き才能に期待をかけたのであらう。

年老いて佐渡に島流しの憂き目を受けた世阿弥は、留守宅をこの禪竹に頼り、文通をしている。その中で娘婿の世話に感謝するとともに、この若き才能の作品に細かく評を加えている。ここでは紹介しないが、我が子以上の愛情と、この芸能の将来を託したいとの気持ちがあふれているように思える。

以上を踏まえ、『野宮』を考察すると、御息所を描くのに品位、教養や心情の細やかさの表現を踏まえた上で、例の車争いでの惨めさや口惜しさも表現し、そして、世阿弥の求める幽玄の世界に連れていく。

舞も世阿弥が晩年に完成したであろう序ノ舞を効果的に用い、そのあと破ノ舞を配することで、御息所の複雑な心情の変化を表現している。

禪竹のもう一つの源氏能「玉葛」では、逆に源氏物語の本説とは離れて、男たちに翻弄される玉鬘の内侍をカケリという短くも激しい内的表現であらわしている。今回は紙面の都合で、この曲については深く考察しないが、女物として、三番目的な部分と四番目的な部分を内在している特殊な曲であることだけのべてお

こう。

## 【六】

「半蔀」について考察する。この曲は内藤河内守作とされる。内藤藤左衛門とうとうざえもん（内藤左衛門とも）「後ニハ河内守ト云フ」であろうとされている。『能本作者註文』には内藤藤左衛門作とされる三曲のうちに「夕兒上」という曲があり、これが「半蔀」の別名かとされている。「兒」は「かお（顔）」なので、夕顔の上を主人公とした半蔀であろうといふことかと思われる。また『二百十番謡目録』では「半蔀内藤左衛門作」と明記されている。ただし『自家伝抄』をみると、夕顔を世阿弥作と記す一方で「夕顔上 異作」の作者を「蜷川」あるいは「蜷海」などと記している。この「夕顔上 異作」は半蔀のことと思われる。ここでは『半蔀』は内藤河内守作としておく。

本曲の作者らしき「内藤河内守」は、古典や文芸の素養をはじめ、能の舞台と上演に関する相当の知識を備えた人物であり、細川高国・大内義興・三条西実隆の間にあつた交流は、内藤河内守にその文芸集団の一角に接点を持たせ、彼らの文芸の世界に触れやすい環境が提供されていたと考える。

『半蔀』の詞章は観客に遊女を思い浮かべさせる歌に基づく表現を含んでおり、舞台上には源氏と夕顔の女の出会いの喜びのみが「五条あたり」を背景に広がっている。『源氏物語』や中世の梗概書『源氏小鏡』『源氏大概真秘抄』とは違い、本曲は夕顔の花の贈答に関わる随身や侍女を省略し、その行為を源氏と夕顔の女に任せて、水入らずの情感あふれる恋の物語のような印象を与えていた。

本曲の作者は先行作品の長所を見極め、新作に再構成できる力量のある人物であつたといえよう。このような作品が登場するのは、武士層の文芸の素養が向上した応仁おうじんの乱以降と捉えるのが自然ではないかと思う。

## 【七】

その他の源氏関係曲のうち、「源氏供養」を考察したい。この曲には源氏物語の中の人物は現れず、また、物語内のエピソードとも関係ない。源氏能には含め

ていない。主人公はその作者「紫式部」である。歴史上厳密にはこの人の本名は残っていない。宮中に出仕しており、その時の役名は「藤式部」とある。姓が藤原、父の官職が式部の丞じょうであつたから、と伝えている。ただ、その後源氏物語を現しており、その主要な登場人物である「紫上むらさきうえ」になぞらえて「紫式部」と呼ばれているようである。いつ頃からこのように呼ばれていたか定かではないが、後年、源氏物語に携わった藤原定家辺りからかと思われる。猿樂さるがく発展期の室町時代には、紫式部が近江石山寺に参籠して、源氏物語を着想したと信じられているようである。

ワキは安居院法印で石山寺の観世音を信仰し、参詣すると、急に紫式部の靈に憑依ひょういされた里女に呼び止められ、供養を頼まる。実は、この場面展開はかなり唐突とうとつである。後場を活かすために、簡略としたとも考えられるが、私には腑に落ちない。

その後も、掛け合いのあと、短い謡で女は姿を消す。型のごとく間語があり、後場になるが、これも型の通りで、一声、ワキとの掛け合い、上げ歌でまた、地次第からクリサシクセと流れしていく。また、通常では中ノ舞などの囃子演奏での舞はない。クセ中に舞い、キリの謡で終了する。

この形式は、観阿弥が得意とした曲舞の曲、「百万」「山姥やまつる」や世阿弥作と考えられる「桜川」「三井寺」などの狂女物などと形式が似通つてゐるようと思える。この「源氏供養」の作者は、世阿弥説、河上神主説（以上『能本作者註文』）、金春禪竹説（『二百十番謡目録』）があるが、世阿弥か禪竹のにおいがする。

もともと源氏供養は、紫式部の亡靈が『源氏物語』に狂言綺語を記して好色を説いた罪で地獄に落ちた」と告げたことから、その苦を救うとともに読者の罪障ざいしょうをも消滅させるために、法華經二十八品を各人が一品ずつ写経して供養した法会である。具体的な法要は治承じょうしゆ（1177年から1180年）・文治（1185年から1189年）のころに始まつたとされる。また、中世にも実際に何度か行われている。

この能の全詞章中に、28の巻名が出てくるが、法華經二十八品に擬しているのであろう。キリには最終巻の「夢浮橋ゆめのうきはし」が詠みこまれていて、

この曲は室町時代後期には人気があつたようで、とくに、豊臣秀吉は能楽の中で特にこの源氏供養を好み、1592年（文禄元年）から1593年（文禄2年）にかけて自ら7回舞つた記録が残っている。

他の源氏能と異なり物語の中身とは関係ない場面展開であるが、詞章に源氏の巻名が読み込まれている。これは、室町時代に流行つた名寄せの形で、前述した「葵上」「野宮」などでも散見できる。

ワキの安居院法印澄憲は平安時代後期から鎌倉時代初期にかけての天台宗の僧。父は藤原通憲（信西）で説法唱導の名人として知られる。息子の聖覺は法然に帰依（きえい）し、その弟子として高名となつた。この聖覺も唱導の名手であった。澄憲譲りの聖覺の才能により、浄土宗は唱導の力を取り入れ、世間への布教が進んだ。また、法然門下の親鸞は、聖覺を尊敬し、聖覺の安居院流唱導の技術を手本に、浄土真宗の庶民布教を行つたとある。

この曲が天台宗か真宗のどちらの宗教的素地にあるかは不明だが、一般的に受け入れやすい曲だったのであろう。

私事で申し訳ないが、私の本業である大倉流小鼓では、この「源氏供養」サシクセキリを初心の稽古曲としている。一応の初級の稽古を終え、曲舞形式の曲「清経」「百万」「桜川」「柏崎」「源氏供養」と進む。急に覚える分量が増えて、ここで脱落する生徒さんも多い。これらは浄土教系（浄土宗、真宗、時宗など）の曲である。いわゆる念仏物が多いが「源氏供養」は天台系法要を模したよう思える。

## 【八】

問題として残るのは、「須磨源氏」である。源氏物語には本説となるような場面は見当たらない。この曲では「若木の桜」と「月」がテーマと考えられる。前場で登場する「若木の桜」は「忠度」でも扱われるが、源氏須磨詫居の際のゆかりの木という。また、後場では月澄む須磨の浦に天から音楽が聞こえ、光源氏が月光の中から「童男」としてあらわれ「青海波」を舞うのである。源氏は今は兜率天に住まいしている。兜率天とは、遠い将来に罪深い人々を救うため降臨する

という弥勒仏（みろくぶつ）の住まう天上世界のことだ。本作において兜率天からやつて来た光源氏は、聖なる救世主のイメージとして描かれている。

観阿弥世阿弥の能として、須磨浦を舞台とした「松風」という名曲があるが、この曲も月をテーマにし、前段のシテツレの登場部分には源氏物語の須磨の巻の文章が効果的に用いられている。また、悲運の貴公子源融（みなもとのとおる）を主人公とする「融」にも、源氏物語の影響を観ることができる。このような源氏能ではないが、源氏物語の文章を用いた曲もまた、稿を変えて考察してみたいと思う。

## 【総合】

源氏能と呼ばれる「源氏物語」に題材をとる一群の能作品を通して、能楽の発展期を考察してみた。最初の松岡新平氏の世阿弥と源氏物語との関係は考慮するが、世阿弥のその他の作品には、源氏物語からの引用や、着想が多くあり、世阿弥も意識はしていたのだろう。また、その後、多数の源氏能を生み出した原動力は、やはり世阿弥に発すると考えても間違いではなかろうと思う。稿末に現在源氏能と分類されている作品を登場人物で一覧する。これまで、拙稿をお読みいただき感謝します。

（注）引用①世阿弥と「源氏物語」（松岡新平）編集・発行 中世文学会／制作・登載者 中世文学会

（引用②「世阿弥 風姿花伝・三道」現代語訳付き（角川ソフィア文庫）(p.295)。

（株）KADOKAWA Kindle 版

（以降の引用は Wikipedia より抜粋）

源氏能を源氏物語の登場巻順に並べる。光源氏は最後。

- ①空蝉 〈空蝉〉 〈暮〉
- ②夕顔 〈夕顔〉 〈半蔀〉
- ③六条御息所 〈葵上〉 〈野宮〉
- ④明石上 〈住吉詣〉
- ⑤朝顔斎院 〈槿〉

⑥玉葛

〈玉葛〉

⑦落葉宮

〈京落葉〉

〈陀羅尼落葉〉

⑧浮舟

〈浮舟〉

〈木靈浮舟〉

⑨光源氏

〈須磨源氏〉

〈住吉詣〉

〔引用比較日本学教育研究部門研究年報第14号『能の『源氏物語』—「源氏能」は何を描くのか』石井倫子〕